

---

# **最弱の英雄伝**

かぼちゃ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最弱の英雄伝

### 【ISBN】

9786824

### 【作者名】

かぼちゃ

### 【あらすじ】

そこはふつうのせかいのはずだった  
しかしある日

勇者に騎士、狼男、魔法使い、超能力者にバンパイアなどなど人間の非科学的才能っていう才能が開花し始める

そんな中元々非科学的な才能を売りとしていた占い師や手品師はガングンすたれしていく

何と言つてもそんなことは結構な人が出来るようになつてしまつたのだ

そんな時、呪術師の家に生まれた黒独 尊がそんな奴らに嫌がらせをするためだけに才能を開花させたものが集い才能を磨く大学に入学する

## プロローグ

いきなりだが少し昔話をしようか。

ここ数十年のことなんだが宇宙人が飛来してきた。

いや待って閉じないで、私だって解っている意味わかんないって、  
だけど降ってきたんならしようがない。

しかし宇宙人の飛来は地球人の本来の力を開花させた。

魔法使いに超能力者、忍者に騎士に狼男にバンパイアになる人間が  
続々と現れた。

宇宙人も度肝を抜かれただろう。

私だってそうだ。

家がそういう家系なのは知っていた。

しかし私が騎士になるとは。

生存本能がトリガーダったのかもしれない。

宇宙人に襲われた時、わたしの剣が地面から生えてきて、  
気付けば宇宙人を一人残らず撃退していた。

他のところもだいたいそんな感じだったらしく、  
地球は危機から免れた。

今では約8割の人間が能力者だ。

これによつて人類は持つ力がそのまま序列になつた。

一般階級である私はこの騎士の絶対的な力によつて

王族に準ずる身分となつた。

王族なんでものがあつたのかと驚いたが、それもそのはず、  
新しく作られた身分制度だ。

逆に、何も変化がない人間は、差別の対象になつた。

「お嬢様、そろそろ学園に向かう時間でござります」

「うむ、遅れてはいけないな、さっそく登校しよつ」

「ちつ成金が

「今舌打ちしなかつた？」

「いいえ」

わ、私偉いんだけどなーー

ちなみに彼女は国から支給されたメイドさんだ。

私の世話をしてくれるのはいいんだが、もう少し笑つたりしてもいいんじゃないかな？

たしか彼女もなんかすごい能力者だと聞いている。

なんだか忘れてしまつたが確か紹介の時の資料に書いてあつたはずだ。

それに、お母さんがべた褒めしていた。

「私、お嬢様と比べると非常に劣る能力ですが  
ケルベロス憑き、獣化でござります。」

この人思考読みの能力じゃないのだろうか。  
なんか怖いんですけど。

そしてなるほど、うちのお母さんは犬が大好きだった。  
だから雇つたのもしれない。

彼女に犬耳が生えているところを想像した。

これはやばい、顔がにやけてしまつてなおらない。

なぜか、メイドさんがすゞしい形相でこちらをこちらでくる。やつぱり思考を読み取れるのではないのだろうか。

お手ついてみようかと呟いたけれども

## 第一章、不幸な女の子

ここは才能のあるものが集う大学  
その始業式である。

私、鈴木 サチはこの超有名校に受かったのだ。  
試験は超がつく難易度である。

まあ去年の話だが。

試験とは基本学科試験である。  
合格点は600点ほかの学校とは違いこれを超えれば必ず入学で  
きる。

しかし学科試験の満点は600点。  
大学の試験で満点などとれる人間はまずいないだろう。  
とれたとしたらその人は能力者だ。

実はこの試験の前に能力の点数を決められる。  
その点数が学科試験の点数に追加されるのだ。

例えば私の能力は見えないものを見る力、点数は260点  
ちなみに学科試験は397点だ。  
自慢じゃないが平均点180点のテストである。  
見えないものって何かって?  
なんか人が能力を使うときの波?みたいなもんが見えるだけであ  
る。

それだけで260点、まったくいい世の中だ。

ちなみに炎を口から出す超能力者は820点、魔法使いは1  
200点。

主席の人は確か「「聖なる騎士」」という能力で、

8万と6千点だつたはずだ。

私の努力はなんなのだという話である。

今その人が主席の挨拶をしている。

何という波だろうかこんなに濃い色は見たことがない。

つてかまぶしいな真っ白な光に包まれているように見えるよ。

だけど私の興味はそこじゃない。

能力持つてる人つて怖いし。

あまり能力を持つていなそうな、

つまり波が見えない人を探していたのだが、運のいいことにちょうど前に座っている人が波がほとんど見えないのだ。

いやかすかに黒い渦がどよめいているみたいだけどかなり薄い。これはいける。

ちょっと男の子つてどこがハードル高いけど、勇気を出して声をかけてみよう。

この時は知らなかつた。

この人が下手な能力者よりも全然厄介な人だつてことを。

> 章Ⅱ呪術師 <

俺の家は呪うこと仕事をしている。  
藁人形とか作ってるわけだ。

特別な力なんてない。

ここにいるような奴みたいに、魔法も超能力も使えない。  
まあ確かに、俺は人とは違うかも知れない。  
だが、努力と時間の浪費によって  
恨めしいあいつを転ばせるくらい出来るようになつた程度だ。  
それにこんなことは誰にでもできる筈だ。  
努力さえすれば。

だけど俺は許せなかつた。

呪いなんて信じなかつた人間が魔法や超能力を、いきなり出来るようになつたこと。

当然のようにそんな奴をあがめたて始めたこと。

前からいた俺たちみたいな奴の力は相変わらず信じようとしないつてのに。

この悔しさがわかるか？

解らないだろう。これに賛同してくれたやつは一人しかいなかつた。  
たつた一人の親友だ。

俺と同じ職業の奴らさえ賛同はしなかつた。

いま俺は能力を開花させた奴らが集まる大学に編入した。  
ここで俺の力を見せつけてやる。

基本、あいつらを見下せればそれでいい。たとえ何も見せつけるものがなくたって。

「どうやってここに俺が編入できたかって？手品を見せてこれが俺の能力ですって言つたら、180点ももらえた。

なんてちょろいんだろう。

それなりに緊張して、手汗がやばかっただが能力者なんてこんなものだ。

誰もがよく分からぬ。

それは畏怖の対象になるはずなのに

あとは試験勉強だ。

勉強なんか全然簡単だった。

「あのーすいません  
わ、わたしえっと、こんちわ？」

「誰だろうが、俺は能力持つた奴と仲良くなんかならないと決めて  
いるんだが。  
どうやって切り抜けよつ。

「あれ、聞こえませんでした？お、おーい」

無視だ無視。

「私そんな強くないっていうか  
たいした能力持つてなくて仲良くなれる人搜してて、、、」

いや、お前にはきっと鉄のハートとかいう能力がありそうなんだ  
が、  
なんでこいつ一人で話し続けられるんだ。  
だが能力を持つてないのか、  
、

「こんちわ」

返事を返してやる、俺の性格はそこまでねじ曲がっていないからだ。

「わ、喋った。あ、こんちわ」

「・・・」

「・・・」

「これは俺が返さなくてはならないのだろうか。  
そもそもこいつは誰だ？」

そんな時スピーカーから放送が入った、  
どうやら成績優秀者のあいさつが終わつたらしい。  
本当に助かった。

「毎年のことですが、入学者が定員を割つたので今から最後の試験を始めます。」

「ただ今から、レクリエーションとして配布した学生証を奪い合つていただきます。

今から6時間後に2つ以上の学生証を持っていた方を合格とするので、がんばってください。」

なんだそれは。お前らが適当な入学試験をするからそんな事態になるんだろう。

それとも俺みたいに入つた奴を淘汰するための試験なのか。  
これはかなり非常事態なんじゃないだろ？

これはやばいな。

俺は何もできないじゃないか。

呪いつてのは数日前から準備してやつと、  
相手を転ばせる位の力なんだ。

呪いのわら人形はお守りとして持つてきたが相手の名前がないと  
使えないし、  
もし使えたとしてもかすり傷を負わせる程度のものだ。

まだ目的は何も達していないのにこんなところだ。

リタイアなんて御免だ。

「こ、逃げましょ。」

「こ、こいたら死んじゃいますよ。」

さつきの奴が俺のてを握つて、ひつぱりあげようとする。  
さすがに死ぬことはないだろ？と思つてみると、

なんだあれは。

竜が炎を吐いている。

召喚術つてやつだろ？

話には聞いている。

これでも俺は才能つてやつの情報収集はしたのだ。

「こ、こにいたら丸焼きですよ！」

俺は能力者つてのをなめてたかもしれない。

もうズボンが焼けた。

これ高かったのに。

こいつが手を引っ張り上げなかつたら体じゅう大やけどをしていた所だ。

俺は、見知らぬ女子に連れられ、体育館の外に出た。  
そいえば気になることがあった。

「なあ、なんで俺のことを助けようとするんだ？」

自分で言つといてなんだが、俺は屈折した性格かもしれない。

「知りませんよ、私に教えてください。」

とにかく、予定は狂つたが俺は外に飛び出した。

## 敗北

<敗北>

体育館を出た。とりあえず何処かに向かわ無ければいけないだろう。

あの竜から逃げないといけないし、こんなに人の多いところで、立ち往生していたら、

流れ弾みたいなのに当たってしまう。

俺が選べる道は3つ。

校庭か校舎か、またこの学校の周りを囲むように生えている林の中か。

学校の敷地外はさすがにまずいだろ？と思つからだ。

そもそも2つ以上の学生証の所持となると学生から学生証を奪い取る必要がある。

そう考へても、敷地外はない。

諦めるつもりだけはないからだ。

「あの、私考へたんですけど。」

学園章を奪うにはここにいる人ならざる奴らを倒すしかない。

俺に可能なのか？

成功するビジョンが全く浮かんでこない。

「やっぱり単純な力じゃあなたも私もかなり、不利だと思つんですね。

」

どうすればいい。

切れるカードがない。

せめて準備する時間と材料があれば、いやそれでも、人ひとりをぼこぼこにするのはかなり難しい。

「泣きたい・・・。」

正直、初対面なのに馴れ馴れしいなと思い、少し無視していたが、泣かれても困る。

そろそろ、移動する場所を決めるか。

俺が学生証を奪うには、何か道具がいる。

バルのようなものがあれば何とかなるかもしれない。

いくら何でも人なんだから、後ろからやれば何とかなりそうだ。

「よし、とりあえず校内に行くぞ」

サキは泣きそうな顔をしていたのだが、ぱあっと花が咲くように笑顔になる。

忙しい奴だな。そして、これが女の武器って奴か。

「あ、私もそう思つてました。

校舎内なら、相手も自分もあまり派手な攻撃は出来ないです。私たちはもともとそんなことができませんしね。まさにノーリスク・ハイ・リターーン。

そつと決まれば急ぎましょ。ここにいると危ないですよ？」

「いきなり饒舌だな。

そういえば俺が炎や雷を出せるとは思わないのだろうか。

「そもそもなんでそう思つんだ？」

「はい！なんでしょう。何のことですか。」

「だからなんで俺に派手な攻撃が出来ないと思つんだ？」

「すこし不意を突かれたような顔をするが、  
すぐにふつふつふと不敵に笑い始める。

少し気持ち悪い。

「私は超能力者なんですよ。」

「おい、能力ないって言つていたじやないか、  
嘘ついてたのかよ。」

「私見えるんです。」

「その、力！みたいなのが？」

「なんだそれ。」

「力！とか言われてもな・・・。」

「えつと魔法使いに会つたことがあります？」

「無いが、今言つのはなんか癪だ。」

「私はまず魔力が見えるんです。」

「こう一人でファミレスいつたりすると、  
あ、あの人魔法使いだってわかるんです。」

なんか誇らしげだがお前一人でファミレスいくのかよ。」

俺も行つたことがあるが、一人だとなんか、他の人の席を奪つてゐるようで嫌だ。

そもそもなぜ個人席がないんだ、ああいつた店には！

「おい、そこのお前たち！」

おいらの名前は駄足駿だ！！」

誰だ？ このもつさりした坊主頭は。なんか野球部に入つてますつて感じだ。高校のときは甲子園で活躍したことだろう。すべては妄想だが、本当にそんな見た目なのだ。

「な、なんですかいきなり、私は鈴木サチです！」

あ、そこ自己紹介するのか。

なるほど、第一印象つてのは大切らしいからな。

「お前たち学生証は持つてゐるか。持つていらないなら別にいいんだが、持つてゐるなら置いていけ、そつすれば痛い目見ずに済む。」

持つてゐるが、わざわざそれを言ひ馬鹿はいないだろ。

「持つてますけど、おいてこきません！」

馬鹿なのか、バカなんだな。

「おい駄足、先ず話あおひじゅ」

「問答無用！！！」

話を聞く気はないらしい。

駄足は右足を大きく踏み出した。

そして膝に両手を乗せる。

あいこからこじまでの距離は約5メートル  
さすがに河からでも壁にぶれるだろ。

魔法つてのは呪文を唱えないといけないんだろう？

「や、来ますよー。」

サチが叫ぶ。

なんだと聞く暇などなかつた。

驚くべき、一步でやみナレもの距離を

肺の中の空氣をすべて吐き出されやうである。

俺は舐めてたのかもしれない。

なんだこれは、

俺は自分がことが特別だと奢っていたのかもしねえ。

俺の家のことを馬鹿にして、恐れて、化け物だの人いろいろ言わ  
ってきたが、

あとで、もう二つやつに教えてやる。

「うー、うやつが化け物というんだ。

それのはずなのに、なんでこいつらは英雄で俺たちが化け物なんだ。

「おいらの力は黄金の右足

右足が無敵になる超能力だ。」

その言葉を聞きながら俺は意識を失った。

とりあえずなんなんだそのネーミングセンスは、まるでサッカー少年のようじゃないか。

おいらのこの黄金の右足といつ能力には弱点がある。

強すぎる力はリスクをはらむものだ。

右足が最強になる代わりにこの能力は、使うと30分は動かなくなる。

相手は、林の中まで吹っ飛んで行ってしまったので、学園章の回収は不可能だろ？。

「タックルした右肩がすごく痛い。」

駄足は誰にも聞こえないような声で一人呟いた。

なぜなら、右足以外は強化されないからだ。

## 勝算はマイナス

> 勝算 <

後頭部を木にぶつけて氣絶していたらしく、ズキズキする。まわりも木だらけなので林の中まで飛ばされたのか、と予測する。少しどの程度氣絶していたのかと、心配になるが、田の落ちていないことを見ると、まだ時間はまだあるようだ。

「いてえな、覚えてるよ」

ひとり呟く

相手の姿はもうないので学生証は奪われたのだろう  
カバンの中に入っていたので鞄も取られたかもしれない

「あ、気が付いたんですか  
死んだらどうしようかと思つてたんですよー」

笑顔で怖いことを言ひやつだな

「大丈夫だ、あ、カバン拾つてくれたのか」

どうやら鞄までは取らなかつたらしい  
さすがに犯罪になるかもと思つたのだろうか  
確認するとやはり学生証は入つてなかつた  
しかし藁人形とぐぎと札があるのは良かつた  
これは作るのに時間がかかるからな

「あの、これからどうするんですか」

心配そうな顔をいて聞いてくる  
そういうえばこいつはなんでついてくるのだらつか  
俺に利用価値などほほないはずだ

ん？ やもそもこの鞄ショーンでベルトとくつつこていたんだが  
なんで落つこちたんだ？

俺の推測が正しければこいつやつは好きだ  
正直、親切とか正義とかは大嫌いだからな  
まあそれも推測だ。

好きな奴に勝手な妄想をするストーカーみたいな。

「どうしたんですか？」

「いやすこし考え方をしていただけだ。  
それよりあの始業式であいつしていた奴の名前ってなんだか解る  
か？」

「え？ と、千代 緋色さんだったはずです。」

「よし、そいつはどこにいるかわかるか。」

待つてください、といつて林の中を出していく。

「分かりましたよ、あつちのまつですね。」

いや、いくらなんでも分かるの速いな！

だが、どうやら驚きが顔に出でいたらしく、  
強い人は、力みたいなのがわかりやすく出ていて  
遠くからでも見えてしまつらさいとなぜか言い訳をするように説明  
してくれた

「そこに行くぞ。」

「ええ！ その人試験で最強って言われた人じゃないですか  
その人のとこ行くつて、行つても勝てませんよ！」

「俺がこの試験に受かるためにはそいつしかいない。」

そして一番嫌いなタイプもある。

ケータイを取り出してそいつの記事を表示する  
見出しへ天才、千代紺色の秘密に迫るだ。  
さすが、宇宙人に囮まれたにもかかわらずそれらをすべて倒してしまつ  
ような才能を持つていて英雄は違つぜ。

勝つと考えるところいつしかいない。

他に血液型も生年月日も好きなものも嫌いなものも  
分かるやつがいるとは思えないからだ。  
つて嫌いなものはきゅうりか、意外だな。

だが都合のいい情報だけではなかつた。  
本来喜ぶべきなのかもしれないが、  
その記事には彼女の能力も記されていたのだ。

そう、核兵器でもびくともしない鎧と、  
ダイヤモンドを豆腐のように切り刻む剣を出現させる

能力のことが。

## メイド怖い

俺は鈴木サチの案内で、林の中を進んでいた。

それにしてもこの能力は便利である。何しろ能力者であれば、近づいてくれば

相手より先に気付くことが出来る。これによつて林の中を進んでいる俺たちは一切の敵に会わず進んでこられている。

確かに、ほかの使い道は？ と聞かれるとかなり困るが、ダンジョン系RPGならパーティに一人はほしいキャラクターだろう。

それに、話によると、能力が才能として開花しても気づかなかつたり、間違った解釈をする人も少なくないらしい。

俺にはない可能性だがこいつには少なからず残されていることだろう。

「む、前方に力の反応です。ここは迂回しましょう」

実際に便利だ。そういうえば能力の名前は勝手に決める奴が多いらしい。

魔法だと早い者勝ちなのだろうが、超能力とか、それ以外の特殊なものなら、自分だけの名前を勝手につけるのだ。

俺はこいつの能力をこつそり心の中で、能力者発見器となすけた。そういえば、俺をのしたあのもつさり坊主頭は、自分の能力を黄

金の右とか言つていた。

あれは超能力だ。

超能力は、予備動作のあまり必要のない力の全般だ。

これは魔法と比べると力は弱く、精神力が力の源となる。

基本としてスプーンを曲げるくらいならだれでもできるらしい。

ちなみに、魔法はこれも精神力が力の源となるが、

それによって作つた文字をもとに、そこに自分の言葉を乗せて発動する

またそれも大きく二つに分けられ、純粹な力だけを発現する人と、物や獣を召喚する人がいるのだ。

だがこの二つに当てはまらない奴もいる。

それは、精神力に影響されない力を持つ人だ。

例えばこいつはそれなんぢやないだろ？か、見るからに、気合を入れると良く見えるつて類ではないだろう。

その時、先行していた鈴木が手招きしてきた。

「見えましたよ。」

なるほど、あれが緋色か、長い髪に銀の鎧をまとつてゐるので分かりやすい。

「よし、とりあえず様子を見るぞ。」

「いえっさー」

なかなか乗りのいい奴だな。

しかし問題はこれからどうするかだ。

「そこにいるのは誰だ！」

なるほど、もう見つかつたらしい。

準備も何もしていないんだがな。

「挑戦者か、ふつふつふ、やっと私の力を見せる時が来たようだ。さつきからメイドにばっかり倒されて私戦つてないから、この時を待つてたのさ！」

迷子になつたのは良い誤算だつたな笑う緋色。

なんか思ったのと違うが、こいつが緋色に間違いない。だが、あのもつさつのように、いきなり襲いかかって来ないだけかなりいい相手だ。

「私の名前は、千代緋色いざ勝負だ！」

前言撤回だ。

緋色がとうと手を大きく振ると剣が現れた。それがダイヤをバツサバツサと切れる剣か、

「とひつ」

投げた！！

「あぶねつ」

とつさに避けたが、後ろにある気がバツサバツサと切られていく。「これはやばい。」

「つてがあつたらビリすんだ！ 馬鹿か！！ 死む！！」

噛んだ。しかしそんなことにかまつてられない。

正直この相手に俺が勝つにはまだ一つ足りないものがある。

今は時間を稼ぐしかない。

「避けたらいいんじゃないか。ていつ」

また新たに2本の剣をあれば召喚だらうか手品のよつこゑと出して、投げつけてくる。木の陰に隠れよつにもまつたく何もなかつたよつに切つて進んでくる、剣にどう対応すればいいのだろうか。

それに相手も投げ方が素人だが俺も素人だ。  
これは当たる。そして死ぬ。  
ああ、左の腕が熱い。かすつただけでも切れ味が切れ味なのかかな  
り痛い。

「いつてえな」

だがうづくまつている暇はない。

えい、とかほいつ、とか言つて剣を投げてくる殺人鬼がいるのだ。

呪いつてのは、基本何もできない。  
だがリスクを払えば使い道はある。

それにやつと恨みを晴らす時が来た。  
悪あがきだらうがなんだらうがやつてやる。

鞄から素早く札を取り出しそこいら辺の木に張り付ける。  
そして手じろひな茂みに身を隠す。

「む、なんだそれは、私の名前が書いてあるな」

これは、気になる札という我が家伝統の中でも俺が、「呼びこの

呪い」から派生させたオリジナル

これに名前を書かれるときになつてしょうがないという代物だ。

「えいっ」

緋色は掛け声とともに木、「と真っ二つに切つてしまつ。

あれ作るのにかなり時間かかるのにな…

だが打ちひしがれている時間はない。

どうやらあれは効果が薄いようだ。

人により個人差があるのでしょうがないだろう。

挫けるな俺、一枚2900円作るのにかかっているが、挫けるな。

今度は木の札と五寸釘それに俺の血を垂らす。

これでインスタントノックされるドアだ。

ノックされるドアとは相手を不眠症にする呪いだが、インスタントにすることでただの音がする板となる。

しかし物は使ひようだ。茂みに隠れながら思ひつきりそれを投げる。

聞こえなかつたらそこで終わりだが、あれは作るのに一時間と30分

そして俺の血が必要だからぜひ役立つてほしい。

「「「ン、ン、ン」」

「あつちか、えい、とつ」

「どうやらいまくいつたらしくあらぬ方向に剣を投げつけてくる。

どうだこれが呪いの力だ。みんなもやってみるといい。

準備にかなり時間がかかるが。

誰だ、今他のもので代用すればいいとか言つた奴は！

そうじやないだろ！ 泣くぞ！

「見つけましたよ。すこく大変でしたー」

サチが戻ってきたこいつには緋色の髪の毛を探してもらっていたのだ。

見つかるかどうかは賭けだったが、こいつの能力で何とかなつたらしい。

実はこいつすごい奴なんじゃないだろうか。

感謝は後でするとして、これで完璧だ。

呪いつてのは準備さえ完璧であれば誰にでもできる。

藁人形 特別性の釘 相手の髪の毛 名前 星座 そして

人体のツボの知識さえあれば誰にでもできる。

まあ、この人形を作るのは骨が折れるが。

素早くわら人形にそれらを書き込み、髪の毛を括り付ける。

これで呪いのわら人形の完成だ。

しかし、実際は君たちの思つているような効果は呪いのわら人形にはない。

これは、藁の編み方や材料が比較的簡単なものなので、

藁人形にくぎを刺すとそこに対応した体の部位が、注射に刺される

ぐらい

一瞬いたつてなるの程度しかない。

これだけ準備してこの効果かよ、と言いたくなるがこれが俺の全  
力だ。

だがこの角度で、ここにぐぎを突き刺せば…

「えつなにこれ、えつ、あつ」

緋色の戸惑うような声が聞こえる

成功した！

「よし、こまだ！　あいつの鞄から学生証を奪ひやぞ」

藁人形をせつせと作つて釘を打ちつける俺を、  
微妙な目で見ていたサキには何が起きたかわからなかつたらしく、

「えつなにがおきたの？」

オロオロとしているが関係ない。緋色の鞄から学生証を奪う。  
かなり入っているな。

ちなみに俺が今やつたのは、足がしびれるツボを刺してやつたの  
だ。

ダメージとしてはほとんどゼロだが、この使い方なら、1時間は足  
がしびれ続けるはずだ。  
呪いの勝利だ。

「き、気合だあ」

起き上がつた！

まあ足がしびれる程度なので、がんばれば普通に動けるのだ。

「学生証はすでに奪つた、ぜ、全力で逃げる」「いえっむーーー！」

もう30分は時間が経つただろうか、実はもう戸とかたつているんじゃないかな。

だがはぐれたメイドが戻つてくれた。

最初は、謝つてくれていたんだがなぜかどんなことがあつたを説明していく」とドンドン

態度が剣呑になつて行つてしまつた。

「それでお嬢様は迷子になつたあげく、そこで足を抱えて何をやつていらつしやるのですか？」

メイドが怖いよ

「えつとなんか、足つっちゃつたみたいでなんかめちゃくちゃ痺れてて・・」

「それあなたは、学生証8枚はあつたはずなのにすべて奪われたと」

なんか言葉遣いが少し乱暴になつていなかと思つたが、指摘したら火に油を注ぐようなものだつ。

「いや、なんか事故つていうかその…」「めん」

平謝りするしかない私、だつて怖いもん

「まあここに来る間に12枚は奪つて来たので大丈夫ですか、」  
さっすがケルベロスさんです。  
つていうか私つてやつぱ足手まといだつたのかな  
りますし」

あと一時間あるんですけどー

## 勝利？ の代償

「あのー、腕つて大丈夫なんですか？」

ふと、俺の腕についてサチが質問をしてきた。  
まあ当然だろう制服が真っ赤になつていて。

だが切り口がきれいすぎて逆に治りが早く心配はない。たぶん。

「問題ない、慣れているからな。」

これは強がりなどではなく、本当に慣れているのだ。  
ある理由で俺は痛みには強い。

「本当に大丈夫ですか？ 血はもう出でないみたいですがそれ、  
絶対痛いですよね？」

確かに痛いがこの程度の痛みより、伝えなくてはいけないことが  
ある。

そして、このぐらいでへこたれていたらやばい。

「さて、人を呪わば穴二つといつ言葉を知つてるか。」

「あ、人を呪うと帰つてくるつてやつですね。」

なかなか分かつてるじゃないか、一般人には知られていない言葉  
だと思つていたが。

「そうだ。そしてさつき俺は緋色を呪い、それをお前は手伝つた。

呪いつてなんですか？ と聞いてくるがそんなことは関係ない。  
時間がないのだ。もうすぐ始まつてしまつ。

というより俺はもう始まつている。

「あのー、もしかしてさつきの緋色さんみたいになるんですか？」

惜しいな、発想は悪くない。

「少し違う。正直あんなもの比べ物にならない。」

そう、俺が痛みに慣れている理由はこれなのだから。

「お、驚かさないで下さこよ。」

足を抑えるサキ。

そんなに怯えなくともいい。あいつは大げさに反応していくが、実際やべ、足痺れた、ぐらいなのだから。

「いやまあ、今回はそんなにびびくないだろ？が

「な、なんですか！」

「運が悪くなる。」

「へ？」

いやいや、これは結構やばいと思つたんだが。

「いや、運が悪くなるんだ。」

「え、別にそんなこと」

全然違うてことないじゃないですかー、と言おうとしたサチの顔がどんどん青ざめていく。

「ガルルル」

なるほど、きっとおれの後ろにはきっと魔獸かなんかがいるんだろ？

聞いたことのない鳴き声がするわけだし、大きな影が出来ている。

俺たちは全力疾走した。

サチも意外と足が速いんだな。

ちょっと置いてかれ氣味だ。運動不足がたたつたか。

ここには、あらゆる超能力者、魔法使いがいる。  
運悪く何が起こるのかさすがにわからない。

ちなみに、不幸つてのがどのくらいのもんかというと、  
リアルに隕石おっこりてくるぞ。

まあ行つた呪いによって、程度も違うのだが。

生き残れるのかだけが心配である。

ちなみに今、どこからともなく炎の玉みたいなのが、頭にクリーンヒットしたが、  
そして、肩が痛すぎて気付かなかつただけで足からも頬からも血が  
出ている。

絶対に俺は挫けない。

逃げるとときに、後ろを振り向いてはならない

逃げるときには後ろを振り向いてはならない。  
そんな言葉をどこかで聞いたのを、思い出していた。

「あと、28秒だ！」

「何がですかー？」

「不幸な時間だ！！

だからがんばってはしれ！」

そう俺は度重なるこの呪いの、

副作用を受け続けることでどの程度のことすれば、  
何秒、不幸時間が来るかを把握していた。

「わ、分かりましたー」

だがそんなことを把握していても、

魔獣の勢いは止まらない。

林の中をつっきて逃げているので、

木をなぎ倒しながら進む魔獣と5分5分といった所だが、  
どうやら林ももう終わりで校庭に出るらしい。

どうせこれも偶然だはなく運悪くつてやつだ。

あと12秒

俺たちは校庭に出た。

複数人、人がいるが運よく助けてもらえるなんてことは起こらない。  
これだけは、言える。

「さやあ」

サチが転んだ。

俺は自分のいのちを投げだしてまで、  
他人を助けるようなできた人間じゃない。

しかし、俺は、そいつの未来も、家族も、希望も、時間も、友情  
も、また、

そのすべても、奪う覚悟も消す覚悟も、出来ちゃいない。

俺はその時、初めて魔獸を見た。

全体的に青い犬って感じだ。

牙が大きく背中も青い焰に包まれている。

なかなかかっこいいじゃないか。  
名前も知らないし、初めて見たが。  
さすがにこれやつたら、死ぬんじゃないか?  
こんな大それたことはじめてやるぜ。

「な、なんで。」

右半身を腕からガツツリかじられた。  
血が半端ないな、噴水のように出ている。

だが、泣き叫ぶことはしない。

痛いのは慣れてるしな。

「なんで助けるの。あつたばかりなのに、  
私、あなたの学園章持つてるんですよー  
それにはあなたより年上ですー！」

言つてることが支離滅裂だし。

人を助けるのに理由なんていらないと、かつこよくいいたいが、俺に罪を着せ、暗闇の中に8年閉じ込めたあいつへのただの当て付けだ。

つていうかやつぱりおれの学園章奪つたのお前かよ！

最初、少し助けられたと思つたからこいつが持つてんだろうな  
ぐらいで取り返すのは、ちょっと遠慮してたのに…

まあどうにしろ俺はあいつから奪つつもりはなかつたから、  
行動は変わらなかつただろうが。

「不幸時間はもうく終わつてるでしょー。  
なんでなんですか！」

いや、普通の運に戻つただけで幸運になるつてわけじゃないしな。

「もう、時間は終わつてるのに何で、暴走をやめないの…！」

なんでなんで五月蠅い奴だな。それに、

「お前の不幸時間は終わったが俺のは終わつてない。  
お前が手伝つてない呪いもあるからな。あと、18秒はあるな。  
それに魔獸つてのは、獲物をしとめないと、消えないんだろ？」

まあ、実際雑誌で読んだ情報だから本当のところは知らないんだ  
が。

その時、「おれ」の右腕は引き抜かれた。

死ぬ時つてのはあまり怖くないって話を聞いていたんだが、これは怖いな。完全な無つてのは想像しただけで、怖い。それとも、まだ死ぬほど傷じやないから怖いんだろうか。

「うつ」

そしてさすがに痛い。血も流しそぎたみたいだ。

「私はまだあなたの名前も聞いていないのに。」

魔獸を消した後で、サチは呟く。

どうやら私はもう不幸ではないらしい。

「肅清の時聖なるものも紺な、、、」

そのあとと言葉はもう俺には届かなかつた。  
血がないからつてよりも痛すぎて気が遠くなる  
慣れてもこれは、無理だ。

黒独 尊は、まぶたを閉じた。

「む、やつてしまつたか。 これはやばいな。  
死ぬなよー 少年ー！」

嘘

なんか夕飯のおかずがハンバーグだと思つたらカレーだった時つて  
カレーが嫌じやないんだけどなんかいやは時ないか？

同様に完全に死んだと思つたら死んでなかつた時、そんな気分だ。

まつたくそんな気分だ。

「あらためて、血口紹介をします。」「  
なんだこいつ

「私の名前は鈴木サチです。  
助けてくれてありがとう。」「  
紹介してくれ、誰なんだ？」

「まあ先生が助けたのはお前じやない  
そこにいる新入生なんだけどな。」「

「それに先生の炎獅子を消し炭にするとはやるな。」

「えつ先生だつたんですか。  
だつてその杖、生徒に配布されるものですよね。」「

「ああ、これはぱくつた。

それより、先生はそんなに影薄いのかよ。」「

いやお前の影は濃い。

どこの学校に学生服の上にマントを羽織つている奴がいるんだ。

「それに、あんたのこと知ってるぜ。

2年の目だろ。」

体が動かない。

つーかこれ、あれじゃないか靈体みたいな感じ?  
幽体離脱していくーみたいな。

「お前はこんなことが起きないよ!」「るんじゃないのか。」

「すいません。完全に油断していました。」

「油断ぐらいであの程度の魔獣に後れを取るわけないだろ?」「どうこいつはどうか?

「それが、何度もやるうとしたんですが、杖が折れてしまつて、  
それに魔石もなぜか碎け散りまして…。」  
なんの話をしているんだ。

「確かに折れている。何をしたんだ?。」

「それが何もしていないんですけど…」

「さすがにそれはないだろ?。杖が何もしていないのに折れるはず  
がない。」

それにどうやつたら杖なしで炎獅子を燃やしたんだ?。」

「あの、なんか不幸時間つてのがあって、

それが終わつたときに壊れてない魔石があつたのを見つけて。」

「もういい、別にこいつが嫌いでわざと見殺しにした、  
とこ訳ではないだろ?。目が赤いしな。」

とつあえず、あとで職員室にここ。

「分かりました。」

「おいなんか、おいてかれている感が否めないが、右手が生えている。」

「俺の体に何をした！  
いや嬉しいが怖いんだ。」

「とにかくこいつは、どうなんだ？」

「学園章は10枚所持です。私のを含めてですが。」

「そうじゃない、お前の目ではこいつの力はほとんどないんだろ。  
しかしここいつは、帽子から鳩をだし、私たちが選んだカードを三回も当てる見せた。まるで手品のような能力だ。」

まあ、手品だしな。

「しかしその枚数所持はなんなんだ？」

「いったい、こいつの能力はなんなんだ？」

「そんなことより俺のちぎれた腕を治したのはお前か、  
お前の能力はなんだ。  
マジで半端ねえな  
俺こんなところ来なきやよかつた。」

くつそ、なんか突っ込みどころが満載な気がする。  
何より、俺の腕がどうなつてどうなつたが気がするがここはどいいだ。

さつきから背中冷たい。

「私にもわかりません。髪の毛を拾つてことと無茶ぶりをされましたが、それを何に使つたかは全く。」

「斎藤先生、何してるんですか？廊下に生徒をほおつておいて白衣を羽織つているので、保険の先生だろうか？ よつと俺を片手で担ぐ。」

いやいてえよ！！

完全、今背骨軋んだ音がした！  
つてかここ廊下か。

道理で背中が冷たいはずだ。

「まつたく困ったものね、生徒をあんなところにまおつておいで

もう喋れそしが声が裏返つたりすると恥ずかしいから  
もつ少し黙つておこう

「それに斎藤先生の召喚した炎獅子に噛まれたんでしょ

マジでーあいつのせいかよ。

「でも斎藤先生がその腕、治してくれたのよ。  
彼の能力は超再生でね。彼に触れるもので生きているものなら、  
自分の体が、頭だけになつても一瞬で再生できるの。  
だけど痛みはすべてあの人にかかるわ。」

「それに結構心配だつたみたいで、あの人親指

嚙みすきでギザギザになつていたわよ。」

まあ絶対許さないが

助けてくれたのには感謝しなくてはならないだらう。

「はい、保険室についたわよ。」

固いベットに投げられる。

「痛い。」

「あら、喋れるようになつたの？」

「まあな、お陰様で」

「でもせっかくここまで来たなら、いろいろ試していかない？　ここ以外ではないような薬がたくさんあるわよ」

差し出された薬箱には、確かに変な薬草や液体の入った瓶がある。

それには確かに興味がある。  
だが好奇心は猫をも殺す。いつたいどのくらいの猫が、好奇心で死んでいるのかは知らないが。

「飲まないが、効果は教えてくれ。」

「飲まないが、効果は教えてくれ。」  
む、予防線を張つてきたね。と笑つて

よじまつままで質問に答えてあげようとした。

「これは薬以外のことも聞いていいのだと判断した。

「俺は受かったのか？」

その質問が来るとわかつてていたかのように、迷つことなく。

「さあ、まだ決まってないわ。

そしてそれはここで決まる。」

「時間切れといえども、あなたは学生証をたくさん持っていたし、安全と不正防止のため、受験生に紛れた生徒を、助けたそうじゃない。」

俺のために新たに試験とは、大変嬉しいが、  
今回は鳩を持つてないし他にもできるマジックなんてない。

受け答え次第で落ちるわけか、ここは嘘をつき倒すしかないだろう。

「まあ質問は後二つ、その二つであなたの合否が決まるわ。」

なんか意味深だ！！

難易度高そうなんだが！！

へへ、これなんだ、自由度が高すぎなんの？いや解らない。

「う」

「2

なんかカウントダウン始まつた!!

「ここは素直に質問するか

「何を言えば俺が受かれるのか?」

「私がわからないことなら何でも  
そしてあなたが知っていること。」

そういうてパソコンを用意し始める。  
こいつ、インターネットで検索する気だ。

「3」

カウントダウン短くね。

「2」

「1」

よし、ここはなんか藁人形の特殊な編み方  
3種類とかでいこう。これならインターネットには乗つてないはず  
だ。

「ちなみに、これはサービスなんだけど  
私の能力教えるね」

「私の能力は相手に問われたことを相手が知つていれば

「たえられる能力よ。」

おわつた――  
ただのムリゲーだった

「さあ最後の問いは？」

いやこれも試験なんだから何があるはずだ。  
俺が知っていることで、それはつまり相手も知ることになるのだが  
あいつが知らないこと。

いや、なくね？

「ほれ、はやく。」

時間もないしもうこれでいいか。

「もし、運悪く8年間父親の罪をかぶつて、牢屋みたいなところに入れられたとして、はたして出てきたとき、父親はなんて俺に言葉をかけ俺はなんて答えたか。」

「つらい過去がありそうだけれどまさか、そんなお涙ぢょうだいで、受かれると思つているの？」

「わかるのか？」

「ん？」

「本当にお前に分かるのか？」

「いいわ、なら答えてあげる。」

もう忘れたかったんだがまあいいか。  
じいじで復習しても。

「あなたのお父さんは、私はいったい誰を殺したのかと聞い  
あなたは、人形って殺せるのかとこたえた？」

「答えてないじゃない。」

それに、質問を質問で返すのはマナー違反だと思つわ。」

「意味が解らない。残念ながら、不合格よ。」

やつぱダメか。理解できないで合格かと思つたんだが。

「なあ正解はなんだつたんだ？」

「あなたが答えを知らないものには答えられない能力なんだけど。」

じゃあお前もわからないってことか？

こいつ絶対許さない。別に何するってわけじゃないんだが。

「三鷹先生、嘘はいけないな。解らないなら合格にこするんでしょう。」

「それがどうしたんですか斎藤先生。」

「いや、先ほど意味が解らないと、あなたはおっしゃったのに

不合格では約束が違うのでは？」

さつきの斎藤先生か

俺の腕を直してくれたやつか。

だがこうも連續して普通じゃない奴が現れると気持ち悪いな。  
そうだもつといえ。

盗み聞きですか？と露骨に嫌な顔をする。

「あなたは、自分のせいで怪我をさせ、  
責任を感じて居るようですが、試験に私情を挟まないでください。」

「私情を挟んでるのはあなたではないですか？  
こんな試験私でも無理ですよ。」

そうだそうだー

「一体何があつたんですか？」

「別に、ただの『冗談です。  
ため口がうざかったので、つい。』

つい、で不合格にされたのか俺は。  
ため口直そうか一回よく考える必要もあるな。

「それでは、合格でいいですか？」

「まあ、」<sup>1</sup>これは斎藤先生の顔を立てます。」

マジか。あきらめかけたぜ。

「では、君つこてきなさい。」

案内しよう。」

「君、行く前に質問に答えてくれる?」

俺は頷く。

「牢屋みたいなところに閉じ込められたって書いていたけど  
本当かしら?」

「いや、まあその通りだが、実際はただの藏だ。です。  
テレビもあつたしな、です。」

「何をしたら8年も閉じ込められるの?」

「俺は何もしない。」

つい険しい顔になつているのがわかるが、  
こればつかりはしょうがない。

「せつ、別にあなたを最初から落としたわけじゃないの。  
本当よ? 最初の質問で、私のバストサイズでも聞いていれば、  
合格にしたわ。」

「だつて、あなたをおとす理由がないもの。  
だけど、俺は受かるのかとかなんかムカつっちゃつて。」

わかるでしょと黒いながら舌を出す三鷹先生。  
いや別に巨乳には興味なんてないしな。

別に小さい胸が好きって意味じゃないぞ。

勘違いすんなよ。

嘘を羅列してみるもんだな。何とかなつたぞ。

せじ、せじ、せじ、せじ、せじ、無事、合格できそつだ。  
これで安心して、作戦を開始できる。

さて、俺たちを全否定するような能力者の巣窟。  
こんなとこ、ぶつ壊してやるぜ。

才能つてなんだよ。まつたく。

とつあえず、このわざを奪つた薬草みたいなのを、  
学食がなんかに入れてみよ。

## 保健室での密会

事業参観

「さて、あの子はいつから平氣で嘘をつくようになったのだろうか。

」

保健室のロッカーから声がする。

ロッカーを開けるとボサボサの髪の中年が中にはいつていた。  
私は戦闘には向いていない。

能力は超能力系、特殊型、相手の問いに相手が答えを持つていれば答えることが出来る。

ある程度、魔法薬の知識はあり、常人よりも強いといつ、自負はあるが、この場で不審者と戦い始める理由はない。

「親御さんですか？」

その可能性はないともいえない。

変人の親は変人だ。

「ええ、愚息が今度は何をやらかすか心配でね。

あなたは超能力者か、初めて会ったよ。  
では私もやつてもらつていいかね？」

ええ、と答える。

どうやら危ない人ではないようだ。

出てくるところはあれだが、少なくとも敵意はないように思える。

どうせ、今までの会話を聞いていたんだろう。

いつもならそんな人をおもちゃにするような要求は聞かないが、あの子と言っていた、どうやら黒独君の親御さんらしい。興味がある。

緊張しますな。えーおほん、と黒独のお父さん（だひつ。）は、話し出した。

「彼は私に罪を着せて現実から逃避する癖があつてね。」

「わたしの息子はいつたい何人、殺しましたかな？」

なんの冗談か。さすがにあの子が人を殺すわけがない。サキという生徒をかばって傷を負つたといっていたからだ。

私にため口で態度も最悪でくそむかついたが、根は優しい生徒なんだろう。

やはりこのおっさんただの変人か。

しかし私の口から出たのは驚くような答えた。

## その呪いの姫は一騎無限戦争壁

「これは、この国唯一の国家特別大学つてのに認定されている。宇宙人との戦争で、最先端技術などは手に入らなかつたが、人類は、特にこの国は兵器開発でかなり大きな利潤があつた。

それゆえ、成金趣味とまで言わないでも、

かなり金のかかつた校舎を予想していた。

俺は、どこかに旅行に行くとき下調べなどしない主義だ。よつて、かなり普通な見た目に少なからずも落胆していた。

だから気付かなかつた。

普段ならこんなミスはしない。

もしかしたら、少なからず合格したことを喜んでいたのかもしれない。

「尊君。」

いつもならここで逃げるべきだつた。

俺のことを名前で呼ぶ奴は少ない。

みな、俺の家の名前で俺のことを覚えるし、

何より俺がこの名前を好きじゃない。

ちなみに誰も俺の名前を正しく読めてないんじやないかと、少し不安になつてきたのでいうが「みこと」が俺の名前だ。

容姿はこここの学生とさほど変わりない。

俺は間違いなく初対面だった。

だが、ここは！

「黒くん、知り合いかね？」

俺は逃げる。

明らかに道に迷うが、捕まるよりましだ。

「知り合いなんて、母ですわ。」

これは予想外だった。

俺の母は、もつと歳食つてたはずだ。  
そつ、少なくとも俺が家を出る前は。

これで何度目の離婚か再婚か。

今度の母さんは若いな！

俺はもてないつてのに。

べつに悔しくなんてない。

そんなことを考えていたので一瞬逃げ遅れた。

「さあ、おうちに帰りましょう。」

そういうて鎌と人型に切り抜いた紙を取り出す俺の新しい母さん。  
なるほど、数日でそこまで習得したのか。  
俺ほどじやないがなかなか才能があるな。

それとも分家の人間だろうか。

なら、このレベルを使ってきても不思議じやない。

準備期間が欲しい。

呪いつてのは、正直、こここの能力者に比べれば攻撃力は果てしなく  
薄い。

なので、気合さえあれば大体の呪いはやり過げられる。

そして不幸になるという副作用がある限り、限りなく自滅に近い。

しかし、それでもこの状況はまずい。

こいつ一人でここにきている可能性は限りなく〇に近い。

爺さんが来ていたら俺は死ぬ。

つまり足止めされたら終わりだ。

爺さんに見つかる前に対策を練る必要がある。

残念なことに、俺の持ち物はもつトンカチと予備の釘、亀の折り紙しかないので。

勝てる見込みは果てしなく〇でしかない。

なぜなら、俺の爺さんは最強の域にいる。

死神とまで恐れられる。まあ呼んでいるのは俺だけだが。

「おぐみょうじょうじんはいかいぜんぐり…」

呪い言葉が始まった。

逃げるならここがチャンスだが

ならべくこいつが他の奴に連絡するのを遅らせたい。

そのためには、齊藤先生。

あんたに手伝つてもらおう。

「君のお母さんは何をやつしているんだ。」

わかるよ、齊藤先生どんなにきれいな女性でも、鎌をもつて、変な踊りをいきなり踊り始めたら引く。

だがこいつが単純でよかつた。

これは、鎌で人型に書いた紙の足を切り刻むことで、

そいつの足を動かなくする呪いと、7枚の人型に切った紙、  
4枚の馬の形に書いた紙、さらに短冊状に切った紙を、  
68枚をばらまき、これは無限を表し…。

まあ細かい説明はいい。

要は、これが俺の知つている呪いつてことだ。

足を動かなくする呪いと壁を作つて、そつちに行きづりへする呪い  
だ。

だがしかし、弱点もある。

不幸になるのとは別に、紙をばらまいた場合はその範囲外に  
術者も死ぬほど行きたくなる。

こんなの初めて使うが、亀の折り紙を解き、自分の名前を、  
口を噛んで出した血で書く。もちろんただ名前を書くだけじゃない。  
特殊な文字だ、基本呪いつてのはこの文字を使つ、何の文字かは知  
らないが。

まあ歴史など何でもいいのだ。

ドン引きして言葉を失つてゐる斎藤先生に、それをペタッと張る。  
これでおまえは形式上は俺だ。

がんばってくれ。

俺は逃げ出した。

「ふふ、邪魔をするんですか？ 底うんですね？ それでは、」

俺はもう階段を上がろうとしていて、後ろを振り返つてなどいな  
いので、

変な誤解をされたあげく、

鎌でめつた刺しされようとしている先生など見てはいない。

あの人でよかつた。

確か超再生するんだろ?

それにしても新しい母さんは容赦ないな。

病んでれってやつか? 違うか。

「こり待て、黒独! お母さんもやめてください。

痛い痛い痛い。なぜかあいつを追いたくない。なんでなんだー。」

俺が言つてもあれかもしれないが大変だな、齊藤先生。

私はそんなに弱いんだろうか。

一時間に及ぶ説教を受けて私の自信は赤点すれすれの地点まで、落ち込んでいた。

私は、数年前、一人で宇宙人達を撃退した。

それでマスクromには、ヒーローのように扱われ、

その記事を見ると私の能力はすごいことになっている。

確かに私の能力は、ダイヤモンドさえ切れる剣を作れるが、私は切れない。

剣は使い手を選ぶのだ。

それだけではない、初めの一回の時は地面から剣が生えてきて、私自身もすごく強くなつたが、そんなことはもうおこらない。

でも、無制限に剣を無制限に作り出せるといつのは、自分でしかなりすごいと思う。

その証拠に、この学校でも私はいちばんの成績をもらつた。

それだけじゃない。

私はかなり強固な鎧を作り出せもある。

なんかテレビでは核爆弾でも破壊できないみたいに言つていたが、本当だらうか。

少なくとも私は試していない。

そもそも放射能とか絶対防げない。

だつてこれ、結構脇とか隙間あるし。

試験の残り時間は1時間とちょっと。

地面上に正座したままそんな『高説を聞きつけた私の頭はパンク寸前で。

生まれて初めて心からの土下座をしてしまった。

実際はあまり内容は入ってきていなかつたが、正座がきつかった。

男なら軽々しく土下座なんてするもんではないが、私は女の子なので許してもらおう。

「まだ、話の途中ですが。」

「そこを何とか。」

「本当に反省しているからしゃつているのですか。」

「もつほんとに限界です。」

とても深い深いため息をついた後、

それではどこかゆつたりと座れる場所を探しましょうか。

と言つて、メイドは学校の校舎のほうへ歩いていく。

土下座しても説教され続けるのかと暗い気持ちになつたが、まあ地面よりは楽だらう。

少しは説教の内容もちゃんと聞き取れるだらう。

学校の校舎に入ろうした時、すいません。と声をかけられた。

メイドさんが体を私とその人の間に入れて、臨戦態勢に入ったのが

わかった。

私は、この人の本職は軍人か何かだと思つてゐる。  
まだ試験は終わつていない。

帰つた人ならたくさんいるだろうが、まだ試験をあきらめていな  
い人もいるだろう。

そんな人に襲われる可能性は大いにあるのだ。

「何か」用でしうか。」

この写真なんですけど、ここに写つてゐる人見ませんでしたか。  
そういうて、出してきた写真には私から学園章を奪い去つた人だつ  
た。

そういうえばこの人のせいで、こんなに怒られているのだ。  
なのに、私だけ怒られるのはおかしい。

そう思つと怒りがわいてきた。

解つてゐる。あんなところで私が転んだのがいけないんだ。  
だからつて全部持つていくことはないじやないか。

2個ぐらい置いて言つてくれてもいいのに。

そうすれば私も怒られずに済んだんぢやないか?  
まあ私も剣で切ろうとしたけどさ。

「私は存じ上げません。」

メイドさんがそう答えるとすぐに、そうですかと言つて、  
身を翻して林のほうに走つて行つてしまつた。

私が知つていたのにな。

なんとなく罪悪感があつたが、私には関係ないことだ。

お説教が嫌だったので、ぐずっていたら三階まで来てしまった。  
ここまで2人ほど、人に会つたが1人は私を見るとすぐに逃げてしまつたし、

もう一人は全身血だらけで、30代ぐらいの大人がいたが、  
私は大丈夫だ、試験に集中しなさい。と言われたし、明らかに私たちより年上で、

マントも羽織つていたので、教師なのだろう、と思い放つておいた。  
なんとなくこの学校に入るのが不安になりだしていたが、  
ここまで来たのだ。やめるのはもつたいない気がする。

結局、理科室みたいな大きな教室があつたので、  
そこに座ることにした。

「さて、話の続きですが。  
お嬢様がなぜあんなところでうずくまつていたのか、  
もう一度状況を確認しましょうか。」

「いや、なんか足がつっちゃって。」

またじとじとした目を向けてくる。  
そんなことで、と言いたげである。

かなり憂鬱な気分だったが、じつくりと話してやううと意氣込んだ  
所で、  
後ろのほうの机が動く音がした。

「どうかなさいましたか。」

気になつて席を立とうとしたら咎められた。

直接そういうったわけじゃないが、なんとなくそういう感じじる。

ここは座つてたほうがよさそうだ。

しかし、後ろを向いてみても何もない。

きっと何かの拍子に机とかが音を上げただけだひつ。

それよりも私は、どうせつて墓穴を掘らないように話をすりながら話をするのかに必死だった。

## 逃亡劇

少し前は、意外と普通だと思っていたこの校舎だったが、広い。とてもなく広い。

先ず3階まで上がってきたが、まだ階段は続いているし、廊下も長く、一人でいると何か不安になるようだ。

人影もなく、廊下を走りたい衝動に駆り立てられるが、あまり廊下などの見晴らしのいいところにいるのは得策ではない。

そもそも、何人ぐらいで追つてきたのだろうか。

完全に逃げ切ったと思ったのに、どこで俺の居場所をつかんだのか、

謎が多い。

そして、母さんが変わっていたことは衝撃だった。

俺は父さんの名前を知らない。

あいつは自分の子供にさえ自分の名前を教えなかつた。  
名前さえ解れば、いつも呪つてやろうと準備しているので、  
すぐに呪つてやれるのに。

俺はとりあえず、どこかの教室に入るのがいいと思い、  
理科室みたいなところに入つた。  
窓際にビーカーがあるので間違いないだろ？

廊下から足音が近づいてくる

誰かが、この教室に近づいてくるのだ。つい。  
急いで、机の下に身を隠す。

誰であろうと見つかるのはまずいからだ。

俺の家人間でなければ大丈夫だが、俺の家人間かどうかは近づかないとわからない。

幸い、俺の家人間には共通点がある、初対面の俺の母さんに気付いたのもこれのおかげだ。

親指に家紋が付いた指輪。これは、家の人にすべてがつける事を義務とされている。

理由としては、呪いで跳ね返つてくる不幸から、親を守るためにも。

要は、ただのおまじないみたいなものだが、みんなつけている。  
俺はつけてないが。

机の下に隠れたところで目があつた。

やはり男なら、人それぞれ女の子のタイプってのがあるだろ。俺は、まず黒髪が好きだ。そしてショートカットがいい。おかげばはさすがに少し嫌だが、髪の毛が伸びる人形みたいなのが好きだ。

そして無口で、色白なら最高だ。

髪は肩より長いくらいで、黒髪だ。

本で顔が半分隠れているが、目は大きく、くちゅとしている。全体的に小動物のような雰囲気を醸し出している。

とりあえず、口をふさぐ。

心臓が縮み上がったが、叫ばれたり声を出されたりするのはまずい。手に唇や頬があたつて柔らかいが、もう部屋に誰かが入ってきていると思われるるので、しょうがないのだ。

(しゃ、喋らないから手を離れて、く、苦しい。死んじゃう。)

手で口を押さえているので、声など出るわけがないが、なぜか話しかけられた気がする。

(ちゅっと、氣のせこじやないからとつあえず手を、手を。)

（焦った、マジ焦ったー、死ぬかと思った、  
もひつ学生証持つてないよ？ いじめないでよう。）

泣きそつな声だ。いや声は出していないのだろうが、そう聞こえる。  
これはなんなのだろうか、幻聴にしてしませつきつと聞くんですけど  
はないか。

（あ、それはね私の目を見たからだよ。  
私は最後に私の目を見た人が、近くにいるときに、その人の心を見  
たり、  
話しかけたりできるんだ。）

そんなことが本当にできるのだらうか。  
それに心を読めるとはどの程度までできるのか、  
それが本当なら、今も心を読まれていることだらう。  
というか正直、五月蠅い。

（違うー！ これは私の心がそのまま相手に伝わっちゃうんだって。  
私いつもはこんなにおしゃべりじゃないよ。）

といふか、なぜこことこるんだ。

（ああ、なんか廊下歩いてたら、学生証渡さないと氷漬けにされる  
とか、  
言われて怖くなっちゃって、その人に学生証渡して、危ないから、  
試験終わるまで隠れてようとおもったの。）

へたれだな。

（ニヤニヤニヤニヤ、無理だつて、私」れしかできな」し。）

確かにこの状況じゃこんなことができても使えないな。

（…、あ、へえ、あなたの母さんって年齢的にお姉さんって感じだよね。）

それ以上言つたらまじで殴る。

（ふふふ、私とあなたでは、あなたの心をそのまま見える私のほう  
が有利なのだ。）

（）  
取扱いに思はぬとか  
えくこくせんかだらね

完全にドヤ顔だったがむなしくなったのかすぐに暗い顔になり、

(使えないとか言わないで傷つくから...)

なんとなく慣れてきたので、これ一人とも傷つくだけだからやめないかと、心の中で提案した。

（あなたが涙を流すか、私が他の人と目が合うかしないとこれ解けないから無理。）

確かにそれは無理だ。女の前でなくなど俺のプライドが許さない。こいつはそういうことも俺の心を見て知ったのだろう。

なんか、心の中が丸見えみたいで嫌だ。

(やうなんだよ、私これ出来るよくなつてから友達いなくなつた。)

いきなりお前の過去を語られても困るんだが、  
それはそらう、誰にでも秘密はある。

(いや、でもね、実際そんなには丸見えじゃないんだって、  
本當にある程度なんだって。)

そうなのか、確かにその人の心がすべて見えたたら頭が混乱だらう。

(信じてくれるの！ 初めてだよ、そんな風に思ってくれる人…  
友達になつてください！)

心の声つてのは考えたことがそのまま伝わるのだらうか、  
かなり自分に素直なやつだ。

(お願ひします。黒獨くん一人目の友達になりたいです！  
暗闇 用つていいます。)

こいつ俺に友達と言える奴が一人しかいないことを馬鹿にしてる  
んじやないだらうか。

(そんなことないよ！)

なんかもうどりいい、考えたことすべに突つ込まれるのは  
疲れる。

それに、俺のやうとしてることも知ったうえで友達になつてく

れといふんならなつてやつてもいい。

(あ、全然気にしないよ、私も化け物言われてきたし。)

何故だ、才能が開花した奴らはテレビなどでも英雄扱いで、そんなことを言ひやつはないはずだ。

(表だつては言われなかつたけど、田があつたりするともつまろくそ言われたよ。)

それはお前が何かしたんじゃないんだらうか。

(いや、まあその人の秘密とか、分かるから強請つたりもしたけど。)

最低か！

(だから少しばかり解るし、いいと思つよ。協力しちつて言われたら、微妙だけど。)

基本、才能が開花した奴全般は嫌いで友達にはなりたくないが、まあ一人くらいいてもいいか。

(やつたー、友達できたー。私黒髪で色白で無口でよかつたー。君の好みにドストライクでよかつたー。)

とりあえず殴つておいた。

そしてお前は絶対に無口じやない。

(いや、私、最後に喋つたの、いつか思に出せないぐらご無口だよ？

私、休み時間とかずっと本読んでるタイプだし。 )

確かにかなり厚い本を読んでいる。  
というかそれなら俺も読んだ。確か…

( ネタバレはやめて… )

相当焦ったのか、頭を机にぶつけた。  
かなり痛そうだ。

( だ、誰のせいだと思つてるんだよう。 )

「 誰だ… 」

やばい見つかった。  
そしてやばい、あいつは千代緋色だ。  
なんでこななどこな。 )

変！身！

（ねえ、この人って怖い人なの？  
心読めるとか読めないとかじゃなく、あなたの体震えてるけど。）

あまり意識してないつもりだったんだが、  
トラウマになつていたらしく。

月、たぶん俺、切り刻まれると思ひ。

（切り刻まれるってどうこうこと！？）

「おお、いい所に。さつきの奴じゃないか。  
こいつに説明してやつてくれないか。私は悪くないって。」

（なんか全然フレンドリーじゃん。）

確かに、気にしていませんよという感じだ。  
これが力を持つてる奴の余裕つてやつなのか。

「お嬢様、この人たちがおっしゃっていた人たちでしょうか。」

メイドだ。

俺に正しい知識があるのかはわからないが、  
長いスカート履いて手前にエプロンがあつて、頭に白い布みたいな  
のがある。

つまりメイドだ。

(メイドだね。)

「二つの賛同も得られたので間違いないだろ。歩きづらいのか、そして制服じゃなくていいのか。俺も、焦げてたり切れてたりとあまり人のことを言えた服装ではないが。

「さて、私はどうでもいいのですが、お嬢様が納得なさらないでしょ。」

学生証はすべて奪わせていただきます。」

なんか、どこのアニメの変身前のよつたポーズをとる。これはあれか、なんちゅう仮面になる気なのか。

「へん、

「私は、もう『気に』してないよ。」

「そうですか。お嬢様がそうおっしゃりれるな。」

少し残念な気もしないでもないが、千代さんの一言で、助かったしい。

（助かったはずなのに、なんでこんなに残念な気持ちでいっぱいなんだろ。）

「それでは、お茶を入れさせて頂きます。」

なあ、つづめー。

( なに? テンパつてるのは伝わつてへるがど、  
いきなりフレンドリーだね。 )

これどうすればいいんだと黙つ?

( 分かんない、なんかお茶飲み始めちゃつたね。 )

「 どうしたのですか、お座りください。お茶を用意させていただき  
ます。」

ひつして地獄のお茶会が始まった。

## 一生ゲーム

「アールグレイです。」

「うむ、ありがとう。」

「ああ、すいません。」

「…ありがとうございます。」

紅茶なんてよく分からないし、初めて飲むが、おいしい。

(現実逃避しないで、私こんなおいしくない紅茶初めてだよ。  
氣まずすぎるってか、あなたが緊張しそぎて、私まで緊張してるんだ  
だよ。)

確かに、本当は味なんて解らない。

アールグレイってなんだ、確かイギリスの伯爵位ではなかつたか。  
チャールズグレイ伯爵が何故、こんな所で出でくるんだ。

(マイナーすぎるよ、なんで紅茶は知らなくてそっち知ってるんだ  
よう。)

「うむ、お説教も終わつたし、なんかゲームでもしよう。  
メイドよ。なんか持つてないか?」

「ち、あんまり調子に乗るなよ。」

「な、何か言つたか。」

声が震えてるわ。

「いじえ、トランプと一生ゲームがあります。」

いやどうに一生ゲームあるんだよ。

「ううう、ううう」

そういって、背中からゲームの箱を取り出す。  
本当にどこから出したのかが謎だ。

そして俺何も言つてないよな？

( 言つてないと思つよ。たぶん。 )

「うむ、私は一生ゲームがいい。」

みんなは？ といった目を向けられる

「ああ、うふ。」

「……。」

「ひしてゲームが始まった。

要是双六で、ゴールした時一番金もつてたやつが勝つゲームだ。  
ルーレットを回して、

千代さんは野球選手。

マイドは漫画家。

俺は芸人。

月はトレジャーハンターに決まった。

ゲーム序盤は所詮運ゲーなので、そんな差はつかないと思つたのだが、

チュパカブラに襲われ、キャラられて100ターン休みになった。

なんだこのゲーム。

まだ、3ターンめなのに。

暇だなー、と思っていたが、8ターン目に仙台さんが、津波に流されて、無人島に流れ着き50ターン休みとなつた。

「なんなんだこれ」のゲーム。

そんなことで仙台さんから、話しかけられた。

「ここはしつかり返さないと、  
微塵切りにされる可能性がある。

「あ、あ、おう。」

（それうまく返せないよ。）

五月蠅いな、お前もは喋つてすらないじゃないか。

おまえは、双六の中で、トレジャーハンティングしちゃよ。

（喋つたよ、「…ありがとう。」と「…いい。」つていつたじやん。  
私めつさがんばってるじやん。）

「どうしたんだ？」

月が変な事を言つのに氣を取られていた。

「いや、別に。」

「そりゃ、なにかこう、質問とかないのか？  
私はあるんだが。」

そういうてバツクをまたぐりだす。  
そして出してきたのは、あの時使つた藁人形だった。  
まあずたぼろだつたが。

「この人形お前のだらう。これの血がついてないのがあつたりしないか？  
ならべくなら、釘で刺さつたりしていないのがいいんだが。」

なるほど、あの時は腕から血が出ていたし、べつとつと血がついている。

そもそも、藁人形なんてなんに使うのだらうか。

確かにちゃんと作つてゐるので、  
相手の名前も特殊な文字を使って書かなくてはならないので、  
単体でもらつても意味がない。

しかし、これが欲しいというなら作つてあげてもいい。

「誰か呪いたいほど憎い奴がいるなら、普通に殴つたまゝが早いぞ。」

「？、はは、確かに呪いと言つたら藁人形だな。  
だが、そんな使い方をするわけじゃなくだな、その、  
可愛いから、一体欲しい。」

同志か！――！

ルーレットを回していた、用がびくうつとした。  
(ど、どうかしたの。)

緋色のヒョウが少し好きになつた。

「よし――いくらでも作つてやる！  
今持ち合わせがないのが残念だが、絶対作つてやる――！」

「なに、自分で作つているのか、これは商品で売つていても、  
不思議ではない完成度ではないか。」

ガシツと握手をする俺たち。

「な、何をなれつてこるのでですか？」

少し焦った様な感じでメイドが「こちらに近づいてくる。  
一生ゲームはメイドさんが一位上がりしたらしい。」

特に何事もなく6時間終了の鐘がなった。

こうして、入学試験はあっけなく終わった。

泣きつかれたので、月には俺の学園章を一枚わけてやった。

まあ傍から見たら、いきなりお願ひとつぶやいて土下座された。緋色とかは戸惑っていたが、俺には、親からも気持ち悪がれてるし、おかあさんが浮気してるのも知ってるの私だけだし、絶対に帰りたくないんだー。という声が聞こえてからじょびがなくだ。

ほんのちょっとだけかわいそうになった。  
それだけだ。俺のタイプとか、そういうのは関係ない。

とりあえず、俺たち四人は合格した。  
あとで聞いた話だが、最初の竜の召喚によって、すでに大半の生徒  
が、再起不能、  
逃走をしていたらしい。

今年の合格者は、348人。

定員が800人だということを考えると、かなり少ないらしい。

あと、あいつなら大丈夫だろうが、俺の親友も合格していると信じたい。

俺も相当こいつらを恨んで、殺してやりたいとさえ思っているが、あいつの無念は、俺の恨みの数倍だ。

しかしケータイに出無いので、少し心配になってきた。

それに受付がこれから30分の間だそうだ。  
道に迷っているということもあるし、俺は、2枚提出して、  
合格した。そして4枚まだ手元にあるのでもしもの事があれば助け  
てやううと、  
思ったのだ。

戦闘を制限するために教師たちが、校庭に出て行った。  
それについて、俺は親友を探しに出た。

親友の名前は、鬼神 柳

俺は、鬼と呼んでいる。これはあいつからこう呼んでくれと言わ  
れた。  
俺は、俺を、尊と呼ばない」とで了承した。

さて、どこを探すかは簡単だ。  
奴は、自分に徹底的に厳しい。  
もつとも険しそうなところに行けばいい。

「…私も、行く。」

月だ。ここに俺と隣のときは口で話せ、と言つたらすじく静か  
になつた。

「…私も友達を探す。」

袖をくいくいと引っ張つてくる。

どうせ俺の考へてることとは問答無用に伝わつてしまつたのだろう。

心を読むのをやめないと言つたが、代わりに誰かの気持ちを読み続  
けないと、

いけない私の気持ちになつて、と言われてしまった。  
なら別に、答える必要はない。心を読まれてしまつてはいるのだから  
う。

勝手についてくればいい。

それに入探しは多いほうが早く見つかるはずだ。

「どこか過酷な場所知らないか？」

「…過酷な場所。」

そういうて、月は燃え盛る体育館を指さした。

## 鬼対竜

そこはもう、体育館とは言えなかつた。

鉄骨は剥き出し、嫌なにおいが漂つて、完全に火事の跡だ。

「はつはつはー。」

中にひとがいる。後姿だけが見えている。  
そしてそいつは、笑いながら、倒れた。

「おう、黒狼。とりあえず魔法使いつてのには勝つたぜ。」

奥から、よく知った顔が現れた。焦げていたが。  
いや燃えていたといつたほうが正しい。

もう制服の袖はないし、このなんかいろいろ大変なことになつて  
はいたが、  
こいつが勝つたというんだ。  
勝つたのだろう。

「なにを。われはまだ負けでは……いない。  
われの名を借りココに存在を記せ。」

しかし、負け犬はまだ負けを認めない。

「ドラゴンーーー！」

「「グアアアア」」

青いドラゴン。その頭の上に負け犬は乗っていた。  
どういう仕組みかはわからない。

召喚術ってやつだろうか。

しかし今になつては意味をなさない。

鬼が笑つていたからだ。

どんなピンチもこいつが笑つてれば何とかなる。…はずだ。

俺が、ヤンキーに絡まれていた時も、犬に追いかけられた時も助けてくれた。

そしてあいつは言つていた。

俺は銃には負けないと。

なんたつて伏虎は最強の武術だからだと。

魔法や超能力なんてものが現れる前は。

「噛み砕け！」

まっすぐ、大きく口を開け、鬼にドラゴンが迫る。

鬼は、思いつきりドラゴンの上に載つてゐる負け犬めがけて、  
大きく振りかぶつて石を投げた。

「ふぎや、」

負け犬にヒットすると同時に、ドラゴンは煙と化した。

「あ、帰るか。」

勝利を収めて、満足したのかそんなことを言い出す。

「いや、この学校に入るんじゃなかつたのかよ。」

「忘れていた。」

どうせそんな事だらうと思つていた。

俺はいいといつたんだが、負け犬にも、学園章をわけてやつた。  
いい戦いだつたからだそうだ。

どうやら、一人で6時間ずっと戦い続けていたらしい。

他にも巻き込まれたのか氣絶した奴がいたが、  
俺は鬼をむかえに来たのだ。助ける義理などない。

「…す、…何の能力なの？」

「誰だ。」

月は俺のことを指さし、

「…友達。」

鬼が怪訝な顔で俺を見るから、しおりがなく、  
頷いてやつた。

「うん。 そうか、名前はなんて言つんだ俺は鬼だ。」

それにしても変なことを聞く、そんなこと聞くがなくても、用にはわかっているはずだ。

(いや、心を勝手に見るのは、失礼でしょ、目を合わせなければいいんだし。)

俺に失礼だから。

「…用。」

「つき?」

「…そり。」

無視され始めた。

そしてお前は、それキャラ作つてんのか。

(ち、違うよ。人と話す時はいつもテンパつてこうなつちゃうんだよ。)

「ない。能力などない。俺が出来ることは努力のみ。」

「…本当に?」

「なあ、黒独、お前喋らないな。ビリしたんだ?」

用のせいで喋る必要がなくなつてつい無口になつていたらしい。

「いや、なんでもないんだ。

早くいいつけ。受付はまだ時間があるけど、こんな感じでやつへつしてたら、燃える。」

そうだな。とこって俺たちは校舎に戻った。

負け犬は置いて行つた。

気絶したまま起きなかつたらそれはそこのせいだ。

そう、基本俺たちに任せられが必要ない。

もうしきめつてね。

まあどうでもいい。

すべてはこれから、これからだ。

## 初めての授業

大学つてのは、どの授業を受けるかはある程度自由だ。まあそれにもまして、この学校では魔法、超能力なんでものを扱う。

かなり多い選択肢が用意されていた。

円は、いい先生がいる抗議を受けると得など言っていたが、俺も鬼もそんな授業に何の興味もない、しかし、大学生活を遊び倒すなんて目的でここに来たわけでもない。

なので、毎日できるだけ多く、適当に入れてくれた。  
それにはんの少しだけ魔法つてどうなってるのか知りたい。

これから、魔法科目、総合力場発生法 座学の授業だ。  
何を言つてるのかわからないと思つたが安心してくれ、俺もだ。

「~~おまえさん~~じきげんよう。私は魔法科目を受け持つ真田だ。」

おお、完全に悪い魔法使いつて感じのおじいちゃんが現れたぞ！  
ここまで、俺らしくもなくワクワクしていた。

三十分後

「まあ、ここまではみな独学やなにやらで分かつてただろ？  
まあ最初の授業だからな。さてこの、円の意味だが力を大きくまた

は、

属性の確変するためだ。しかし「」で、ほかの記号を組み合わせる  
とどうなるか。「

一番前の席に座つて、「やる気がみなぎつてる感じの奴が元気  
に手を擧げる。

「はい、多くの場合□異なる記号の複合はタブーとされています。」

「うむ、ではどうなる。」

「試したことはありませんが爆発でしょうか、もしくは不発かと思  
われます。」

「よろしい、しかし組み合わせられる記号存在する。  
」では、その失敗する例と成功する例を…、「

よし、総合力場つてやつが魔法陣だつことは理解した。  
しかし、もう帰りたい…。

一時限目

数学 座学

「よーし、今日は自己紹介から始めよつ。私は早川だ。  
みんな自己アピールを今から全力で考えろ。面白くなかったら、  
もう一回だー。」

ああ、数学なら得意なんだが、これは帰りたいな。

八回目で何とか俺の自己紹介は終了した。

### 三時限目

#### 数学 実践

よし、なんだこれは。

なぜか校庭に集められた俺たち。

生徒一人一人の目の前に岩が置かれた。  
そしてそれを砕けといふ。

素手ですか？

「ほりーお前らどうしたー。さつさと砕けー。  
砕けるもんならなー。」

「おい、黒独。」

鬼が少し遅れて校庭に出てきた。

理由は簡単だ、鬼は自分を鍛えることに一生を捧げている。  
つまり、つざき飛びで移動していくから遅れたのだろう。

「何をやるんだ。教えてくれ。」

「おーう。何遊んでるんだ、お前はー。名前はなんだー。」

「鬼と呼んでくれ。」

「うーむ面白い奴は好きだが、遅刻してきてその態度が、  
特別に、きつちり教えてやるかんな。。。」

手をぱんぱんとたたく。

「よーし前らも聞け。実はJJの机には細工がしてあってだな、ある角度で、ある一点とつぶと素手でも壊れるようになつているんだ。

まあ私も初日で砕けるとは思つてない。

数学実践は弱点を計算で叩き出す授業だと思つてくれればいい。

「だが、砕ける奴は砕いてもいいぞー。実際どれだけ固いのかも知つておけー。」

鬼が今度は逆立ち歩きでひざに来る。

「お、割れたぞ。」

「こや鬼よ、お前の右手血だらけだぞ。」

とつあべすお前はJJの授業を受けるべやじやない。



## 気付く

なんか無性に腹が減った。

それに何か、食堂に用があつた気がする。

まつたぐ、結局よく解らない授業ばかりだった。

数学実践にはもう参加しないと決めた。

「…ねえ。」

廊下でボーッとしていたら、用が話しかけてきた。

鬼は4時限目に体育を選択したとかで体育館に行くとか言っていた。

そういえば体育館は燃えたのではなつかたか。

こんなことを忘れていたとは、

(いやいやいや、忘れていたとは、じゃないよ。

無視しないでよ。これ使つなっていうから許可を求めるよりと思えば  
これだよ。

マジきつくな、)

手を可愛くバタバタ振り回してきたので、あえてすべて避けてみ  
た。

「…今のは、はあ、はあ、くちりといふ。」

。

廊下を逃げていたのだが、もつ追つてこなくなつて、

泣きそうな声を出すので戻つてやる。

そしてなるほど、大体3メートルぐらい離れるといの能力は使え

なくなる「ひっこ」。

「なんで泣きそつなんだよ…。少し自分のふがこなせにショック受けたんだ。  
別に無視はしていない。」

（まあ、別に氣にする「じじゅ」なこと無いナビ。）

「なにが。」

（いや、やのぶがいなせってやつ。）

なぜかわからないが、ニヤツと笑った時に少しどキッとした。  
これつてもしかしてドキッとしたとかも相手に向むかうのだらつか。

（やつこえぱれ、誰かに話しかけられた？）

そんな様子はないのに安心する。

それにどれはどういう質問なんだ？

さてはこいつ、誰からも話しかけられなくてへこんでるのか？

少しなら元気づけてやつてもいい。

（やめて… その憐れみ私に筒抜けだから…）

そういうえば何か食おうと思つてんだった。

「そんな事よりなんか食おうぜ。」

奢ってくれよ。」

（なんで私が！ ふつう逆つてか、まだそんな時間じゃないでしょ。

)

「はへ、いやいや、昼飯はもう済んだろ。」

(今何時だと思つてゐるの? あれ、)

「どうしたよ。」

(今、何時だつて。)

「お前、変な奴だな。」

(いや、だつて始業式でもつとお昼ぐらこになるはずで、それから6時間の試験があつて……。)

確かにそうだな。  
ん? 待てよ。

(どうしたの?)

「いや自分で言つて氣付かないのかよ。  
だってまだ外は明るい。それに、その計算なら今はまだ時じひにになるじゃないか。」

つまり今は晩御飯の時間? 「

(…何言つてゐるの? それこそ自分で言つて氣づかないのだよ。  
そもそもこんなに時間がたつてゐるはずなのに、日が暮れてないことが大事件じゃん。)

「なあ、なんかおかしいと思わないか?」

( そうだね、おかしいと思ってない私がいる事がおかしい。 )

「 どうあるへ。」

前回は月のドヤ顔で終わったが、何も進展しない、何すんだよ。  
(…なんか恥ずかしいんだけど、なんで!)  
さて、こんな時は俺の暗黒時代に読みまくった小説たちの解決方法を、真似てみよう。

こんな不思議空間にはもういたくない。

(でもその考え方だと、いつ私たちがこの不思議空間に入ったの?)  
そういえば、俺たちはいつからここにいるのだろう。  
何か予兆があつたはずだ、それさえわかればここから出れるかも  
しない。

そしてお前は、俺の思考に入つてくるな、すごいストレスがたま  
る。

(え、「めん。」)

いや、喋れよ。

(そんなこと言つてそつちだつて声出して無いじゃん、私だけ話し  
たらなんか

無視されながらも付きまとつてゐたり奴だと思われちゃう。)

「わういえば、この学校のこと詳しいのか?」

(うふ。まあ、貴方よりは詳しいね。)

「つかさ俺、喋ん無くてもお前俺の心の中のぞけるわけだら、  
速くこたえるよ。」

そう、ここつは俺の過去とか母さんの事とか母さんの事とか知つ  
ていた。

別に俺が考えたことが解るつて訳じやなく、完全に相手の心の中が  
解つてしまつんだろう。

(いや、母さんの話題に触れたのは謝るけど、それはできないんだよね、

だって私に対して知りたい事とか黒独の中にこいつぱーあるわけじゃないん、

それ全部答えるのは、きついからどの質問か言つてくれないと、も

して

それなりにしか見えないんだって、母さんのことは偶然直後の出来

事だつたし、

そんなことしたら、私が今読んでる本のネタバレされやがりやん。  
読んだことあるんでしょ、私があの時持つてたやつ。 )

いきなり饒舌になつたな、まあ喋つてはいいんだけど。

これだと俺がお前に話しかけて無視されたるみたいだな。  
ちなみにお前が読んでた本、最後にヒロインが裏切るよ。

「マジか！」

「うわつびくつたー、お前喋れんじゃん。やっぱキャラづくつじや  
ん。」

(ちょ、うわー、ヒロイン主人公といい感じだったのー。  
貴方は、後で殺す。そして今のは、驚いたからだよ。。。)

(それで質問つて何？ あとで、性癖さらじりやる。 )

「いや、斎藤先生つているだろ、あの人どのくらい回復できんのか  
なーつて。

あと性癖さらすつてなんだ、心の声漏れてるぞ。」

俺は廊下ですつと立ち話？をしているのもあれだからと、廊下に  
座り込んだ。

(斎藤先生は有名だね、何でもスーパー細胞つての持つていて、誰  
にも移植できる

らしいよ。そんで自分の傷はすごい勢いで回復する超回復もちだか  
らね、

医療界では引っ張りだことか。 )

「は？ 僕その人に腕生やしてもらつたんだけど。ちょっとなんか  
変な

方向に話言つてないか。」

月が間違つていなければ、俺の腕を生やすのは無理じゃないのか？  
俺はあの人の回復速度がどのくらいかが知りたかったんだが。  
(…変だね、記憶違いなはずないんだけど、あと性癖さらすつての  
は、

貴方の裸エプロン好きとかばらす。)

「やめろ…」

俺様は、天野 槟最、記憶に刻め、あまの てんさいだ。

ぜんぜんパツとしねえよ。

やつと俺様の出番だぜ、まったく一番の能力が俺じやないだと？  
もうすぐ制限時間の6時間だ、俺様の一人勝ち、そろそろ教員だけ  
は元に戻すか、

俺も合格しないといけないからな。

俺の能力は空間創作、俺様の空間を作ることができ  
る、そしてそれを現実に入れ替える。

いろいろと条件もつけられるのだが、今回は必要なかつた、  
まったく同じ空間を作つて、ここにいた全員を囲い込めば十分だ。  
ばれる可能性？ ありえないな、空間はまったく同じで、俺以外  
の登場人物  
は全員同じ、たとえばても、まあ学園内外に出ない限りそこから  
は出られない。

まあななり優秀な俺でもこの能力は制御しきれない節がある、  
いきなり俺様人称になつたのもこの能力の厄介さを認識させるため  
だと思われる。

まず、俺様の脳内で空間を作ることが厄介だ、  
能力の発動は一瞬、そのときに脳内で並行的にその空間の温度、色、  
時間の流れ、  
まあいろいろと言い出したらきりがないんだが、完璧に再現、  
または創作しなくちゃならない。

最低でもなくちゃならないものは頭んなかに入れないだめだ、  
温度とか空気とかないとまず空間が発生しない。

たとえば、白い部屋一つ作るにも少しでも頭の中に意識していい空間があると

そこは黒く欠けちまう。

俺様もはじめ空間に穴ばかりでかなりホラーだったが、今では使いこなせる

までになつた、そもそも空間発生したことがもう俺様の才能だ、  
凡人には不可能だぜ？ これを発生させるのは、

さて、そろそろ俺も学生証を奪わないと。

まあ簡単だ、少しばかり時間を速めてもうあいつらは授業中のはず、  
この学校がイカれていてよかつた、基本合格したら出られないとか  
いう学校じゃなかつた

ら、この作戦は使えない、みんな俺の空間の外に出ちまうからな、  
不合格になつたと勝手に勘違いしたやつらは、学生証を持ってないので

学校に入れないだろ？から問題はないが、

合格したやつらは、時間のずれに気づいて戻つてくるかもしれない  
からな。

よし、教員は戻した、職員室辺りに行つてパクつて来るか。

俺は作った空間に入った。

「あつつ。」

何だこれ、体育館が燃えてるぞ。

まいい、どうやら今は4時間目あたりだ、  
しまつたな、太陽が沈んでねえ。これじゃ結構なやつにばれてるか？

騒いでるやつはこないし、やはり教員はスルーしたってことか。

それにしてもこんな単純なミスするはずがねえ、

誰か、俺が認識してないものでもあつたか？

まあ、受験者は大勢いたから意識しきれなかつたやつもいるか。

さてと、職員室の前だ、窓ガラスは割るか、どうせ俺が作ったやつだしな。

はい、進入完了。

よし学生証は、ひとつだけ置いてあるな、俺にとつてくれといわんばかりだ。

これは本格的に教員どもにはモロばれだつたらしい。

「おい、お前何してんだ？」



誰だ？ まあどうでもいい、勘のいいやつがいたとしても可笑しくないし、

俺の能力に気づいたんだろう。

男と女の二人組みだ、

俺様はほかの奴の力なんて知らないが、そんなのがあっても可笑しくない、

だが、俺様までたどり着いたことは賞賛に値する。

「ん？ 俺様を見つけるとは、スーパー・ラッキー・ボーイとガールだな、  
まさか俺様の作った空間だと気づいたのか。」

探りを入れる、まあ相手が簡単に手の内を見せるはずは無い、  
俺様ぐらいビックなら別だが。

「おい、お前！ こいつの田を見ろ！」

なんだ？ まあいい、いざとなればあれがある、見てやるよ。  
ふむ、女のほうは、なかなかわいい顔をしている、タイプではないな、  
もつと純粋そうな奴で無いと俺様にふさわしくない。

女のほうが、いきなり苦しみだす。

俺は何もしていないのだが、よく解らない。

「ど、どうした。」

男のほうも戸惑っているようだ、そして抱き合いだしたな…、めんどくさい、このまま俺だけ戻つてもいいのだが、逃げたなどと思われるは

心外だ。

「わかつた、無理無理言つの俺が無理になる前にやめてくれ。」

何なんだこいつらは？ 今度は男のほうが変なことを言い出したな…。

「何だお前、独り言か？、俺様は損な小さなことで人を評価はしないが少し控えたほうがいい。」

まあいい。

「まあ、ラッキーボーイあんぐガールに敬意を表そうじゃないか、俺様にエンカウントしたという幸運を…！」

さあ、俺様の力をとくと見ろ！

「この能力の名は、天上天下！ まあ恥ずかしいから声に出したりしないけどな。

「 おう、やつと戻つてきたんかー。」

元の空間に戻つた瞬間後ろから殴られる、ちつなんだ？俺様の空間から抜け出すなど不可能なはず。

「これは無駄に授業させた分ー。」

「うがつ。」

2発目を顔面に食らひ、こいつ背丈からして教員か、それなら納得だ、戻してやつたからな。

「これは私が後輩よりも後に気づいたからって馬鹿にされた分ー。何のことかわからないが黙つて殴られるほどお人よじじゃない、

右手でパンチを受け止める、

そして無言で打つてきた左のパンチも受け止める。

「はつその程度、受けられないどでも？」

「馬鹿にされた分はまだ返してない。あー。」

女が口を開けると舌に大きく記号が書かれている、

「早川先生！ それはダメです！」

ほかの教員が叫ぶ。

これはやばい奴か、そして「こいつはやめるぞ」ぶりは無い、舌に小さく火花が散つてゐる。

君、逃げなさい！ 早川先生の魔砲は喰らつたら死ぬぞ！」

本気か、まずいな、空間を  
の空間は俺様でも作れない。

「アーリエえええ。」

時間が無い、この職員室をパクつてこいつだけそこに落とし込む。周りには早川先生だけが消えたように見えただろう。

「刀」  
「か・と」  
「刀」  
「と」

早川先生に後ろから殴られ、俺はダウンした。

「種がわかれれば簡単だ、ここに魔法で移動すれば問題は無い。お前の能力など簡単こやぶれるんだよ。」

いや、早川さん、決めてるとこあればなんですか？」「これはあります

能力の使用自体は違反でもなしんでよ  
怒られ

「起きるやあやあ、金髪ううう。」

俺様の名前は槇最だ。

## テレポート

俺たちは斎藤先生を探しにきた、廊下ですれ違つた侍みたいな頭のやつに

聞いたら職員室にいるんじゃないかと普通に答えられた。

一瞬突っ込みそうになつたが、勝手な先入観で思いつきり突っ込むのは失礼なので

語尾…とだけ小さく呟くに留めた。

職員室に入つても誰もいない。

(ねえ、あそー。)

月が指差すほうを見ると、窓を割る変なやつがいる。

なんか行動からもそうだし、金髪だし、長髪だし、めんどくさいうだし、

係わり合いになりたくない。

しかし話しかけないと話が進まない気がする。

「お前、何してる。」

(話しかけるなんて、勇者！)

月が茶々を入れてくるが無視する。

「ん？ 僕様を見つけるとは、スーパー・ラッキー・ボーイとガールだな、

まさか僕様の作った空間だと気づいたのか。」

めんどうさ이나、日本語をしゃべってほしい。

ちょっと、つきー、あいつの心の中見てこいや、そして僕にこいつの言つてることを訳せ。

(しょうがないな、私の全力を見せるときが来たようだね。)

お、意外とやる気だな。

やつと俺もこいつの能力から開放される。

「おい、お前！」こいつの目を見ろ！

「なんだ？」

ひざから崩れ落ちる円。

「…無理。」

頭を抑えて震えだしたので心配になり、肩に手を掛けようとしたらいがしつとその手をつかまれ、顔をぐいっと近づけられた。

目が血走っている、あと数センチでキスなんだが、これはうれしくない。

「ど、どうした。」

（これは無理だ、あた真ん中にいろんな情報がたくさん入ってきて、もうこれは無理だ、無理だ、無理だ、）

「わかった、無理無理言つの俺が無理になる前にやめてくれ。」

「何だお前、独り言か？　俺様は損な小事なことで人を評価はしないが

少し控えたほうがいい。」

注意されたー、くっそ、窓割つて入ってきたやつに注意された。

「まあ、ラッキーボーイあんどガールに敬意を表そうじゃないか、俺様にエンカウントしたという幸運を！！」

そういうて奴が両手を掲げると職員室に先生が現れた。

そして斎藤先生は俺の後ろに現れた、こいつの能力は何だ？

あれか、あの有名なテレビショコンつて奴か、でも窓も直つたな、なんだろこれ。

「おう、帰ってきたかー、先生お前の母さんにめった刺されたんだけど。」

何故かあの金髪は、俺の知らない先生に思いつきつ殴られている、

何かあったのか？わからなことほ多  
い

それに今ので思い出した、ここに俺の家族がここに来てるんだっ  
た。

そして6時間終了のチャイムが鳴った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7682y/>

---

最弱の英雄伝

2011年12月31日16時48分発行